

# 資料の中の日本人講師

戦前のイタリアとフランス

**Japanese teachers in prewar Italy and France :**

Insight from various materials

小川 誉子美

横浜国立大学

OGAWA Yoshimi

Yokohama National.University

# Research Topic

ヨーロッパの日本語講座に  
日本人講師及び政府・民間団体は  
どう関わったか

……ドイツ・イタリア・近隣国

小川誉子美(2010)  
『欧州における戦前の日本語講座－背景と実態－』  
風間書房

# Today's Topic

1

- イタリア（草創期・戦間期）

2

- フランス 資料の紹介

3

- イタリアとフランス 共通点



# ITALY : Lecturer

	1860~ 1880	1881~ 1900	1901~ 1920	1921~ 1943
FLORENCE	●			
VENICE	▲ ▲ ▲	▲ ▲ ▲		
ROME	●			● ● ▲ ▲ ▲
NAPLES			● ● ▲	● ● ▲ ▲
IsMEO				● ▲ ▲

● イタリア人 ▲ 日本人

# Instituto di Studi Superiori

1. 講座; 極東言語学講座(1863年開設)
2. 講師; A. Severini  
L.Pages, S.Julienのもとで学ぶ
3. 開設の背景: 文部大臣Mamianiが東洋学  
振興のための奨学金創設
4. 講師の業績  
『竹取物語』『浮世方六枚屏風』・・・翻訳・著書多数  
『イタリア極東研究彙報』(1876)・・・海外通信員  
(E.Satow, Aston らの寄稿)

# Scuola Superiore di Commercio in Venezia

1. 設置:外国語学部（アラビア語、トルコ語ほか）
2. 開設・開講期間: 1873年 ・ 15(25)年
3. 講座：週4回、2年、夜間の自由選択科目、無料

## 4. 講師

吉田要作 YOSHIDA (1873-76年 駐日イタリア大使館通訳、  
ウーン万博の通訳)

緒方惟直 OGATA (1876-78年 領事専攻科の学生、25歳で客死)

川村清雄 KAWAMURA (1878-81年 絵画)・・・日本語教授法(1881)

長沼守敬 NAGANUMA (1881-87年 彫刻)・・・自ら日本語教師を志願

伊藤平蔵 ITO (1887-88年 文学)・・・『イタリア語読本』(1910)

寺崎武男 TERASAKI (1908-09年 画家)・・・『日本語口語文法の理論』

(共 Rivetta)

5. 目的: Pebrinの蔓延→養蚕業の危機→対応策を日本産に頼る → 対日外交、日本イメージ形成、日本語が重要性をおびる

6. 推進者:

駐日イタリア公使 Conte A. Fè d' Ostiani

- ・日本政府の信頼: 治外法権の撤廃に尽力, ウィーン万博全権代表,
- ・使命: 日伊貿易の独立性確保(列強の傘下)、価格調整、内地旅行許可獲得

石井元章(1999) 『ヴェネツィアと日本 美術を  
めぐる交流』ブリュッケ

La Gazzetta di Venezia (1872 ~77)  
の記事を紹介

# (1) PURPOSE

・吉田教授による日本語講座は(11月)29日の土曜日の午後8時に開講するであろう。・・・開講式には、日本国特命全権大使佐野常民氏と駐日イタリア大使フェー・ドスティアーニ伯爵の参加が予定されている。両国通商の発展に寄与すべく若者たちに与えられたこの新手段が正当に評価され、多くの学生が授業に参加することを祈る次第である。同時に我々は、この講座を導入したことに関して同校教授会に、また日伊通商の主要な荷下ろし港である我が市が今後の拡張発展に寄与するものすべてを立派に備えるよう効率的に貢献した駐日イタリア大使に、感謝しなければならない。・・・

1873年11月

## (2) COURSE

「商業高等学校におけるこれらの授業には約40人が出席、規則正しく行われている。また、生徒がよく質問し、昨日などは祭日にもかかわらず授業に出席するほどの満足をもって進められていることをお知らせできることを嬉しく思う。この他の事にも同様な覚醒が見られるならば我が国**経済の将来は明るい**ものであらうと思われる。」

1873年12月9日

### (3) PURPOSE

・我々が今追悼している青年は、3世紀にわたりその古い文明のなかに閉じこもった後、ここ数年あたかもその3世紀が存在しなかったかのように頻繁に、そして効率よく西洋民族と交流を始めたあの極東の国の子供である。日本との関係は1854年以來、特にわが国では蚕の病気に關して重要となった。イタリア人は健康な蚕の種が豊富にあるあちらでそれを入手しようとして、それまでオランダ人とだけわずか一港で許されていた外国人との通商が数港に拡大されたのを活用するのにやぶさかではなかった。・

緒方の追悼演説 1878年4月6日

## (4) CHINA EXPRESS in LONDON

「意志の交流とそれに伴う発展にとっての最大の障害が、ヨーロッパ諸言語と日本語の間にある大きな差異であることは言を俟たない。日本人学生は語学習得のため多くヨーロッパに滞在しているが、同じ目的で日本に赴くヨーロッパ人はほとんどいない。この状況を修正するため、ヴェネツィアは、今、全世界のどの都市よりも先んじたのである。…ことをより効果的に運ぶために、エジプトやギリシャの理論家ではなく、実践的な江戸生まれの若い碩学、旧駐日イタリア公使館員の吉田氏が選ばれた。」

1873年11月26日

## (5) Memory: NAGANUMA(1926)

- 「私の如き者が、日本語の先生となるのはおこがましいが、生徒と言っても僅かに五六人、併も一週に三度の夜学である。河村(ママ)君は、片仮名で教えたけど、私は、片仮名と少しの漢字を用いた。やさしい漢字位読めなくては日本語として通用しないと思ったからであるが、夜学の生徒たちは夕食を食ってから遊び半分に来るのであるから、到底本物にはならなかった。当時日本と言え、支那の属国か野蛮国位に思われていたから、生徒も少なかつたし又本気に勉強しなかつたのであろうが、現在の如く日本への認識があつたならば、大いに意味がある講座となつたのであろう」

長沼守敬(1936)「現代美術の揺籃時代」

## (6) PURPOSE (Gattinoni 1890)

「自分は・・イタリアにおける日本語研究者の数がふえることを希望する。日本語の研究をはじめたイタリア人はかなりあるが、満足すべき程度に進歩を示した人は極めて少ない。一つの外国語を知ることが、国を強くし、商工業を盛んにし、やがて文明国の一員となる所以である。もし本書の出版によって、イタリア人が熱心に東洋諸国の言語を習得し、これによって、東洋諸国との貿易の利が外国人のみに独占されることがないようになれば、それは私にとって最大の喜びであり、長年の労苦も報いられるのである。」

『口語日本文法』（Giulio 1890）の前書き

# Japanese Institute in Naples

●伊太利國に日本語學校の設立  
國ベニス府に於て新に日本語學校の設けあり其の教  
師の曾て同府高等商業學校に日本語科の設けありし  
頃其の生徒たりしガツチノニある伊國人にて同校の  
位地の日本帝國領事館に近接せる場所ありと

★1893年12月17日 読売

- 10月に日本語学校開設
- 教師：Gattinoni、  
ヴェネチアの卒業生
- 学校は大使館に近い

# Interwar period

- ローマ大学

野上素一Nogami 前田義徳Maeda

- ナポリ東洋語学校

下位春吉Shimoi 川村芳衛 Kawamura  
摩寿意善郎 Masui

- ローマ中亞極東研究所

野上素一Nogami

# Japan-Italy cultural agreement

- 日伊文化協定：1939年3月23日締結
- 日伊文化連絡協議会

ローマ： 1941年2月（第1回）～1942年12月（第3回）

東京： 1940年11月（第3回）～1943年5月（第7回）

- Italian course in Japan

- ・東京大学

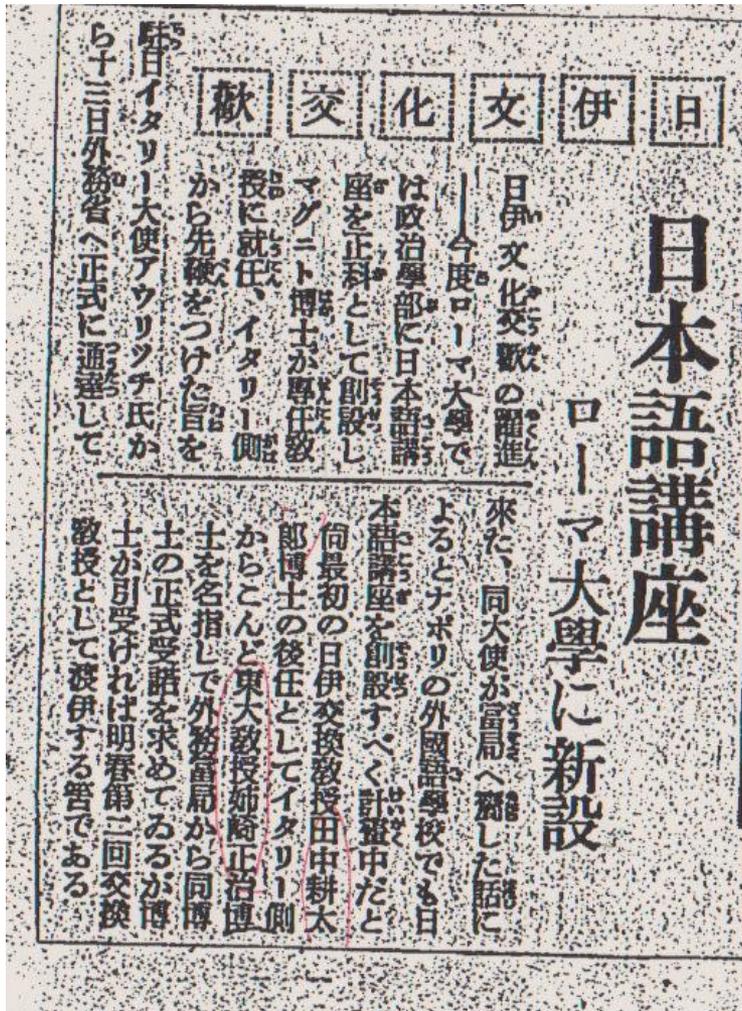
「イタリア語」「イタリア史」「イタリア文学」: Prof. OORUI

- ・京都大学

「イタリア語」1940年12月開設: Fosco Maraini (1912-2004)

原田積善会の出資

# Dept. of Politics at Univ. of Rome



★1936年5月14日 東京朝日

- ・政治学部、日本語が正式科目
- ・ナポリでも計画中
- ・交換教授として姉崎正治、田中耕太郎

# REPORT from Rome ■ ■ NOGAMI

★JACAR

野上⇒外務省

■ IsMEO : 25人 8h/W

Balbi の教科書

■ Rome Univ.: 22・3人,  
3h/W

といふか、これを大切と考へます。  
日本語、日本文化紹介に關しては別便にて詳しく御報告申します  
が、ローマにある中亞極東協會 (Istituto per il medio e estremo  
oriente) には、上級下級合せて二十五人、時間一週八時間。  
ローマ、帝國大學文學部には同じく上級下級併せて二十二・三名  
一週三時間。  
教科書は Balbi 中尉のつくつた文法書を用ひさせてあります。他小  
學國定教科書を用ひてます。  
上級には又朝日、日々等の新聞をもよませて、その文体になれさせ  
てありますが、伊太利人には日本語の發音は全く百パーセント完全に  
できます。ゾアツカリ氏の文法書は高價なものと、英語で書いたとい  
ふ二大缺點があります故割合用ひられません。  
たゞ一つ本の點に遺憾なのは昨年末に註文した小學國定讀本(全巻)

出館人 野上 素一  
國際文化振興會

約十五部が未だ到着せぬこととあります。今同更に三十五部、全五  
十部欲しいのですが、何とか御配慮できないうせうか。  
今迄は Roma piazza colonna に近き Hecker という書店が東京に代理店を  
有してゐるので、それを通じて送らしたのですが、多くの時日を經  
て不正確であります。  
是非とも正確なる中綴方法を購じたいのであります。  
又自分自身の仕事として伊太利文學の有名なるもの、日本譯をつ  
けてあります。  
順序なく書きつけまして失禮致しました。  
三原様はじめ皆様へよろしく。

一月二十三日

野上 素一

c/o ambasciata della Giappone  
Viale Regina Margherita 260  
Roma.

出館人 野上 素一  
國際文化振興會

# REPORT from Napoli ■ ■ MASUI

## ★JACAR

摩寿意⇒外務省

Napoli

- ・14人 10h/W
- ・Magnino (law)
- ・Vaccariの教科書  
『イタリア語4週間』  
共同制作

● 現在の名称は  
Reale Istituto Superiore Orientale di Napoli  
と申し、日本語科の専任者は、一二年から四年までを  
通じて十四名。日本語の教員は、ローマ大学の法律  
科の教授であり、同時に熱心な日本研究家であると  
いふマニリーとソム若い教授と私の二人が、ソムです。  
(Magnino)  
● 一年生にはマニリー氏が教へ、私は二、三、四年生を擔あし  
一週十時間の授業を勤めて居ります。  
● マニリー氏は、日本から持ってきた資料の日本文法書  
を用ひますが、学生の中には英語を解さぬ者も数人  
あり、従って一月中は至と、私がイタリア語勉強に用ひ  
たりたる『伊和利法四週間』とソム独習書を利用して、  
伊和利法をやらせ、その他プログラムに於ては、マニリー  
講義部をやらせ、一月からの新学期からは、マニリー  
をプリントに作るべく、今ラッソマスの休暇を利用して  
マニリー教授と協同で、その原稿と作本を中が三回  
です。

# NOGAMI and his father




野上氏父子揃つて  
ローマの教壇へ

豊一郎博士は能の指導

日伊文化協定の締結によつて早くも各種の文化交流が促進され、折々わが古學界のほころびを

じて日本文化紹介のため渡歐中の法政大学を専攻教授野上豊一郎博士及びイタリヤ留學中の同氏令息素一兩氏が

父 子 うち揃つて盟邦の首都ローマ大学の教壇に立つといふ嬉しいニュースがこの程素一氏から國際文化振興會へ届された。素一氏は昭和九年東大文學部卒業後去る十一年來日伊交換學生としてイタリヤに留學し、ローマ大學で言語學を専攻してゐたが

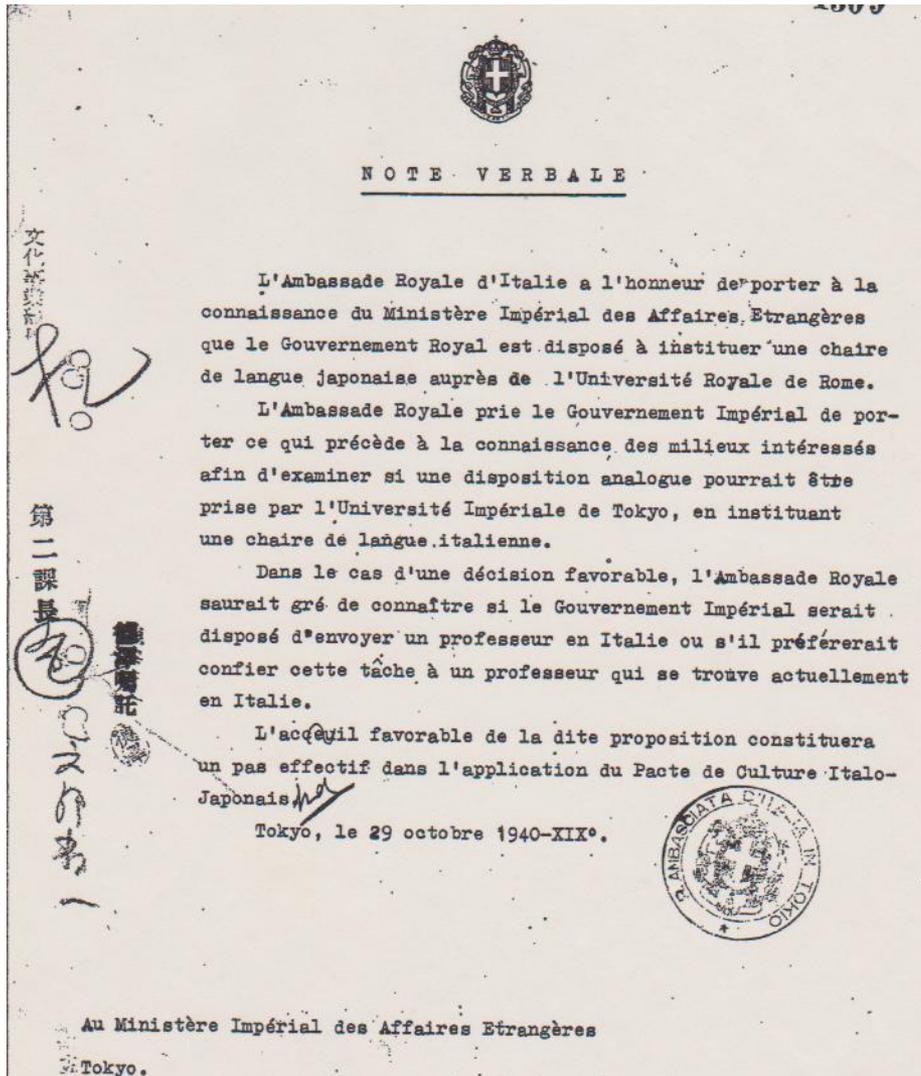
このほど百十點満點のところ百六點といふ同大學でも前例のない優秀な成績で卒業、直ちに同大學の懇望で文學部の講師となり目下同大學に日本文化史及び日本語の講義を担当してゐるが、同地の日本研究熱は物凄いはかり旺盛でそれが素一氏の就任によつて更に拍車をかけられた。そして元日交換教授トウツテ博士、元日交換教授トウツテ博士、學士院副會長でこんど交換教授として來朝することとなつたアオルミヤ博士等を

★1939年4月1日 読売

父：法政大学教授  
能の講演

素一：106点(110点中)  
で卒業

# NOTE VERBALE from Embassy of ITALY



★JACAR

1940年10月29日

イタリア大使館⇒外務省

「ローマ大学に日本語講座開設予定、東京帝国大学にもイタリア語講座を望む」

# Lecture on history of Japanese culture

★1941年11月6日 読売

アウリッチ【元駐日大使】  
ローマ大学で1年間、  
日本文化史の講義

幻燈を用いる



終る際正に眞實はその靈講場」

アウリッチ氏が  
日本文化の講義

「ローマ四日  
發同盟」前駐

日大使アウリ  
ッチ氏はロー

マ大学の懇望

から向ふ一ケ年間毎週日本文化史  
により十一月

の靈講場を行ふこととなつた

講義は日本美術史を中心に古事  
記以後明治維新までの日本文化  
全般に鳥瞰的視念を與へること  
を目的とし、講義には幻燈を用  
ひ學生の理解に役立たせる等々  
ある「眞實はアウリッチ氏」

街の衛生團體表彰





2

# France : Lecturer, Répétiteurs

	1860~ 1880	1881~ 1900	1901~ 1920	1921~ 1945
Paris				
Lyon				

● フランス人    ▲ 日本人

# Opening speech by Léon de Rosny

## 日本語学習の効能 (Léon de Rosny 1863)

「まず日本語と蒙古系言語の比較が**蒙古系民族の起源の解明に役立つ**可能性があること、日本語の漢語の研究が**古代中国語の研究**に役立つこと、**仏教の研究**に役立つこと、さらに日本独自の**文学作品の解読**、**本草学**や**養蚕学**などの日本の伝統産業に関する知識の獲得などに役立つこと」

パリ東洋語学校の日本語講座開講演説

# Japanese informant

「 Répétiteurs , Indigene 現地語の復習助手のポストを設けさせ、多くの日本人留学生を迎えた」

小野吉郎(1999)『日仏教育学会年報』28

- 栗本貞二郎 KURIMOTO Teijirou
- 今村和郎 IMAMURA Warou
- 松浪正信 MATSUNAMI Masanobu
- 本木昌造(オランダ通詞) MOTOKI Shouzou ...

- 小田萬 ODA Kiroku 文部省留学生 法律  
関西大学学長
- 林毅陸 HAYASHI Kiroku パリ政治学院  
應義塾塾長 外交史
- 五来欣造 Gorai Kinzo 明治大学図書館主事  
早稲田大学教授 政治哲学
- 内藤丈吉 Naito Jokichi 数学者 フランス帰化  
日本雜貨店經營
- MOTOYOSHI Saizo, MARUMO Naotoshi, SUGI Takejiro,  
TANAKA Yuzuru, SHIGENO, MIYAMOTO 14名

Deux siècles d'histoire de l'École des langues orientales  
textes réunis par Pierre Labrousse

# Japanese newspaper in Paris

○佛蘭西の巴里斯といふ都で、日本語学専門の會社を興さんとの目  
論見にて書籍館を立て、日本字の新聞をも始めるそうでござります

★1875年11月5日 読売

パリに日本語学専門の  
会社に書籍館をたて、  
日本字の新聞をはじめる

★1879年6月27日 読売

「...商法を盛んにするには、双方の国語がよく通じないでは不都合...商業学校では校長のペノ氏、新設学校のエミル・ギメー氏が発起で2月に商法学校に日本語科を置き、教師は、今泉雄作、高井政章、山田忠終、生徒は60人...」

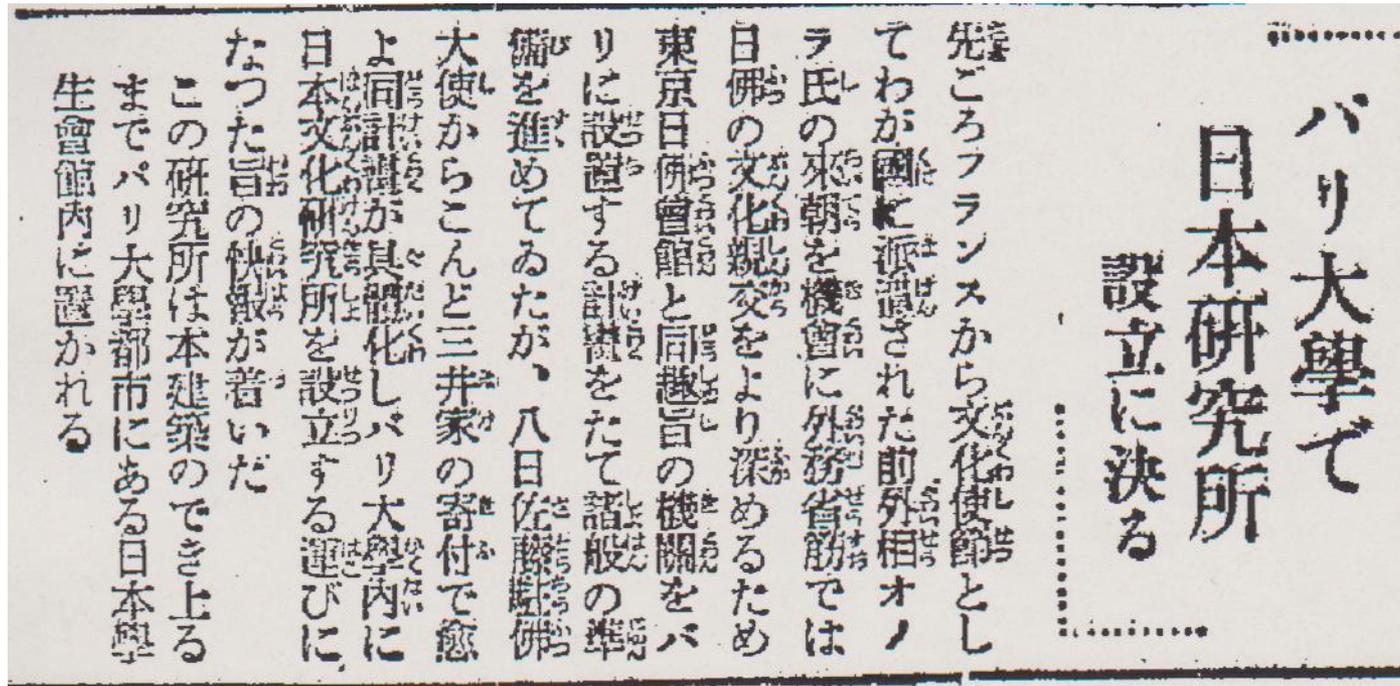


# Japanese lectures

Ecole supérieure de commerce et de tissage de Lyon

- 近藤徳太郎 **KONDO Tokutaro** ギメの通訳 織物学校  
京都勧業留学生・栃木県工業学校初代校長
- 歌原重三郎 **UTAHARA Shigesaburo**
- 今泉雄作 **IMAIZUMI Yusaku** 美術、ギメの手伝い  
京都市美術工芸学校校長・京芸大創設参加
- 富井政章 **TOMII Masaaki** 『神道』博士論文  
日本の民法起草 法政大学・立命館大学初代学長
- 原田輝太郎 **HARADA Terutaro**
- 山田忠澄 **YAMADA Tadasumi** 日本領事

# Japanese Institute in Paris



★ 1934年5月9日 読売

文化使節オノラ氏(前外務大臣)訪日

東京日仏會館と同機能パリに設置 三井家の寄付

3

## Italy

- 1873 ~ Venice
- Native Japanese  
Practical Japanese
- 1863 ~ Florence
- Severini  
Oriental study

## France

- 1879 ~ Lyon
- Native Japanese  
Practical Japanese
- 1863 ~ Paris
- Rosny  
Oriental study

# Acknowledgment

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant  
Number 24520572

基盤研究(C)平成24年度～平成26年度、

課題番号:24520572

研究代表者:小川誉子美

課題名:日本語教育史コンテンツの再構成と史料公開に関する基礎的研究